

診断困難であった稀なトルコ鞍上部腫瘍の一例

井下尚子¹⁾, 野口寛子¹⁾, 中山大子¹⁾, 大田泰徳¹⁾,
藤井丈士¹⁾, 大橋健一¹⁾, 伊藤栄作²⁾
虎の門病院病理部¹⁾, 青梅市立総合病院病理科²⁾

24歳女性。視力、視野障害の急激な進行を自覚し前医受診。トルコ鞍上部を中心に視交差を下方から圧排するように増生する、multicysticな腫瘍を認め、経鼻的に摘出された。急速に増大したため、当院下垂体外科を受診、約1ヵ月半後に再度経鼻的腫瘍摘出術を施行。その後、残存腫瘍に対し開頭術を2回施行された。現在放射線治療中である。

病理組織学的には craniopharyngioma としても矛盾しない adamantinomatous な成分を認めたが、wet keratin は明らかでなかった。また乳頭状増生の著明な成分、さらには唾液腺系腫瘍への分化と見られる筋上皮様の成分が見られた。MIB-1 陽性細胞は、多いところでは 30%程度見られた。手術毎に乳頭状～筋上皮様成分の比率が多くなり、歯源性良性腫瘍様の成分はほとんど見られなくなった。

下垂体～トルコ鞍部には通常の腺腫のほか、craniopharyngioma や、またごく稀に唾液腺系腫瘍ができることは知られているが、本症例のように互いに移行する両成分を持つ腫瘍は文献的にもほとんど報告がない。

クロモグラニン A の発現を伴う多形性腺腫の一例

槻木恵一^{1),3)}, 森 裕介^{1),2)}, 猿田樹理³⁾,
山崎 等⁴⁾, 長村義之⁴⁾
神奈川歯科大学顎顔面診断科学講座病理学分野¹⁾
東海大学医学部外科学系口腔外科²⁾
神奈川歯科大学成長発達歯科学講座歯科矯正学分野³⁾
東海大学医学部基盤診療学系病理診断学領域⁴⁾

【症例】

68歳 女性

【現病歴】

1ヶ月前から右頬粘膜部にしこりを自覚するも、無痛性のため放置していた。症状軽快なく、精査目的に東海大学口腔外科を受診した。

【病理所見】

摘出物の肉眼所見では被膜を有し、内部は白色、充実性で、出血や壊死などの所見は認めない。病理組織学的所見は、典型的な多形性腺腫の組織像が認められる部位が一部に存在したが、大部分は異型性を伴う細胞の充実性増殖を認めた。免疫組織化学的所見では、多形性腺腫に矛盾しない結果であった。クロモグラニン A の発現は良性成分に強い発現を示したが、異型性を伴う部位にはほとんど認められなかった。

【診断】

pleomorphic adenoma with atypia

【考案】

ヒト正常唾液腺にクロモグラニン A が認められる事を、共同研究者の猿田らが報告しており、多形性腺腫は一般的に神経内分泌腫瘍ではないが、神経内分泌への分化を示す症例が存在することが明らかになった。

単房性嚢胞を形成した膵内分泌腫瘍の一例

近藤哲夫¹⁾，板倉惇²⁾，弓納持勉³⁾，岩佐敏³⁾，
加藤良平^{1, 3)}

山梨大学 人体病理学¹⁾、同 第一外科²⁾、

同 付属病院病理部³⁾

【症例】39歳女性、健診の腹部エコーにて膵に嚢胞性腫瘍が認められたため、当院外科を受診。腹部CTでは膵尾部に約径50mmのリング状に造影される嚢胞性腫瘍を認め、嚢胞壁の不均一な肥厚を伴っていた。膵粘液性嚢胞性腫瘍が疑われたため、膵尾部切除が施行された。

【病理所見】膵尾部に厚い線維性被膜を有する径50mmの嚢胞性病変があり、内部には淡血性の漿液性内溶液を貯めていた。嚢胞壁内腔は黄白色調の腫瘍により不規則に肥厚している。組織学的には円形核、淡好酸性の細胞質を有した腫瘍細胞が主に充実性、一部に管状構造を形成して増殖していた。核分裂像 $<2/10\text{HPF}$ 。膵外脂肪織浸潤、脈管浸潤なし。免疫組織化学ではクロモグラニン、シナプトフィジン、グルカゴンが陽性。

【考察】膵内分泌腫瘍 (glucagonoma) と診断したが、肉眼的な嚢胞を形成する膵内分泌腫瘍は文献的には稀であるため、御教授をお願いいたします。

甲状腺好酸性細胞型乳頭癌の1例

東海大学基盤診療学系病理診断学

熊木伸枝，梅村しのぶ，長村義之

好酸性細胞型乳頭癌は甲状腺乳頭癌の亜型のひとつであり、腫瘍細胞の大部分が好酸性細胞からなる乳頭癌である。腫瘍細胞の部分的な好酸化は乳頭癌やそれ以外の腫瘍にも認められる。しかし、多くの腫瘍細胞が好酸性細胞からなる本亜型はまれであり、今回我々が経験した症例とともに文献的考察を加えて報告する。

症例は57歳、男性。8年前に甲状腺腫瘍にて当院を受診し、精査の結果、腫瘍が疑われ甲状腺右葉切除術が行われた。摘出された甲状腺腫瘍は、大きさ3x5 cmで境界はやや不明瞭な淡黄色の充実性腫瘍であった。組織学的には円柱状の腫瘍細胞が乳頭状や濾胞状に増殖し、一部に充実性増殖もみられた。多くの腫瘍細胞は好酸性顆粒状の細胞質と腫大した核および明瞭な核小体を有していた。すりガラス状核、核内封入体や核溝はときに認められたが、少数であった。初回手術より3年後と4年後に再発したため残存甲状腺は全摘出となった。また6年後には、肺・リンパ節・骨への多発転移がみられており、外来加療中である。

転移巣が先行して発見された乳腺原発神経内分泌腫瘍の一例

淵之上史，杉谷雅彦，前田哲代、菊池建太郎，生沼利倫，根本則道

日本大学医学部病態病理学系、
同附属板橋病院病理部

最近我々は小脳転移が先行して発見された乳腺原発神経内分泌腫瘍を経験したので報告する。症例は48歳女性、脳出血症状で入院し、小脳腫瘍が発見され手術された。組織学上、類円形核を有する比較的小型のほぼ均一な腫瘍細胞が腺腔形成なく充実性に増殖し、免疫染色上、NSE, Synaptophysin, chromogranin 陽性で、carcinoid と考えられた。小脳原発であればきわめて稀と考えられたが、その時点では腫瘍は小脳にのみ存在しているということであった。術後15ヶ月で、腰痛出現により骨転移が明らかになった。その後精査で両側の乳房腫瘍が発見された。マンモトーム生検が施行され、乳腺腫瘍の組織像および免疫染色所見は、小脳腫瘍のそれと全く同様であった。小脳腫瘍、乳腺腫瘍は共にER・PgR 陽性、HER2 score 0であった。一般に、乳腺の神経内分泌腫瘍は乳腺悪性腫瘍の約2~5%と稀である。特異な経過で発見された一例を報告する。